

# 調理と化粧品

垣原高志\*

## はじめに

調理を技術と言う面からとらえると、その深さ、広さには限りがないものがあるように感じられる。

化粧品は化粧のために使用される製品の総称で、使用目的から言ってもその種類が非常に多く、追究して行くとその巾の広さ、深さにも限りがないものがある。

しかし、両者ともその最終製品の判定が官能検査による所が大きい点では期を一にしている。それらを考えながら化粧品にふれてみたい。

## 1. 化粧品とは

化粧品は、今日では私たちの日常生活から欠くことができなくなっていると言ってもよい。わが国で化粧品を規制している法律の薬事法では、化粧用石鹸、歯磨も化粧品として扱っている。これらを含めた化粧品を考えた時、化粧品はまさに私たちの生活の必需品のひとつであると言っても過言ではない。

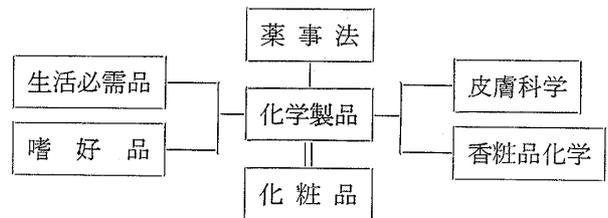
化粧品の中でも、とくに匂いを主にした香水、ローション、色彩に主体をおいたメイクアップ用の製品（仕上げ用化粧品）は消費者の嗜好に左右され易く、時には流行の影響を受けるので、化粧品の中のこの種のものは、嗜好品の範囲に入れて考えた方が良い場合もあり、官能的な調査を無視することができない。

しかし、何れにしても化粧品が化学製品であることに誤りはない。現在市場にある化粧品の殆んどが皮膚科学と化粧品化学の最新の知識の上に立って研究、開発されていると言える。

また、化粧品を考えた時、化粧品は医薬品と違って健康な皮膚に常用される製品である。医薬品にはその性質上、多少の毒性のあるものでも認められているので、その管理は薬の専門家である薬剤師のもとにおかれている。それにひきかえて、化粧品は何時、何処で誰れが扱っても良い様に設計製造されたものでなければならず、薬事法でもその定義の中で「化粧品は人体に対する作用の緩和なもの」と規定し、それに基いて指導が行われてい

る。

これら化粧品の背景をなすこと柄をまとめると化粧品には次の様なことが言える。化粧品とは、その安全性の面から薬事法の規制下にあり、皮膚科学と化粧品化学の理論にもとづいて研究され、生活の必需的な面と嗜好品的な傾向を持つ化学製品を言う。



## 2. 薬事法で言う化粧品

化粧品は、薬事法ではその第2条第3項で次の様に定義されている。「この法律で、化粧品とは人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容ぼうを変え、又は皮膚若しくは毛髪をすこやかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用することが目的とされているもので、人体に対する作用の緩和なものをいう。」

法律で言う化粧品を要約すると次のようになる。

- ① 使用対象は、人の身体に用いるものである。
- ② 使用目的は、身体を清潔に、美化し、魅力を増し、容ぼうを変え、皮膚、毛髪をすこやかに保つもの。
- ③ 使用方法は、身体に塗擦、散布その他類似の方法で使うものである。
- ④ 安全性は、人体に対する作用の緩和なもの。

となる。使用方法から言うと内用するものは法律でいう化粧品に該当しなく、それらは美容食、美容飲料として薬事法の規制外におかれる。

## 3. 化粧品の種類

(1) 法律で言う化粧品の定義を受け、市場にでている化粧品を分類すると次の様になる。

使用目的から、皮膚を清潔に保つための洗浄用化粧品。皮膚の手入れに使用する基礎化粧品。

\* 資生堂技術部顧問

第1表 化粧品 の 分類

	洗 浄 料	基 礎 化 粧 料	仕 上 化 粧 料	芳 香 製 品
皮膚に用いる化粧品	石鹼(透明), 洗粉, クレンジング	化粧水, 乳液, クリーム, 化粧油, パック剤	白粉, 紅, 墨, アイシャドウ, アイライナー	香 水 ローション ~~~~~ パウダー状 練 状 ~~~~~ (花 香 調) 幻 想 的
頭髪に用いる化粧品	シャンプー, リンス,(石鹼)	ヘアトニック, ヘアオイル, ヘアクリーム	ボマード, チック, ヘアオイル, ヘアクリーム, セットローション, ヘアカラー, 新整髪料	
爪に用いる化粧品	リムーバー, キュテクルリムーバー	ネイルポリッシュ, クリーム, ベイスコート	エナメル, カバーコート	
口中に用いる化粧品		歯磨, 含そう剤		

粧いのためのメイクアップ用の製品(仕上げ化粧用化粧品)。

化粧の最終の仕上げに用いる芳香製品。

化粧の対象となる身体を部位別に分けると、皮膚の手入れ用、頭髪用、爪用、口腔用となり、これらによって化粧品を分類すると第1表の様になる。

(2) なお、化粧品を製造機械の選択、分析法の検討に適する様に分類すると次の様になる。

水 物:化粧水, ヘアトニック, オーデコロン, 香水

乳 化 物:クリーム, 乳液

振とう合剤:粉末含有の化粧水, 水白粉

ゼリー状:クリーム, シャンプー, パック

ペースト状:歯磨, ファンデーション

スチック状:口紅, メイクアップ製品, ヘアスチック

ケーキ状:固型白粉, プレスド製品

ペンシル状:眉墨, 口紅, アイライナー

エアゾール製品:香水, オーデコロン, ヘアスプレー

石 鹼:機械練石鹼, 粹練石鹼, 透明石鹼

#### 4. 化粧の目的に用いられる医薬品, 医薬部外品

薬事法は化粧品の他に、医薬品, 医薬部外品, 医療用具等の規制を行っている。

##### (1) 医薬品

化粧品が健康な人の皮膚に用いるものであるのに対して、医薬品は疾病の治療や検査の目的に使用されるもので、製造はもち論販売も薬の専門家の薬剤師の管理下におかれている。中には使用に際して医師の指示を要するものもある。この医薬品の中でもニキビ用(クンメルフェルド氏液)や、あれ止め用(グリセリンカリ液, ベルツ水とも言う)の製品は、化粧品的に使用される場合がある。

##### (2) 医薬部外品

医薬品の中でも病気を防ぐ様な目的で使用されるもので、人体に対する作用が緩やかなものは医薬部外品とい

って、製造は医薬品と同様に厳しく規制されるが、販売の規制はない。しかし製品には「医薬部外品」の表示をするよう義務づけられている。これには次の様なものがある。

口中清涼剤, 体臭防止(わきが, 汗臭, 制汗), てんか粉(ベビーパウダー), 育毛剤(養毛剤), 染毛剤(脱色), 薬用化粧品, 薬用石鹼(デオドラントソープ), 薬用はみがき, き避剤(防虫剤), パーマネントウェーブ用剤, 浴用剤, 衛生綿(紙綿)等があり、この中には化粧の目的に用いられるものが多い。

##### (3) 医療用具

調理とは関係ないので本稿では触れない。

#### 5. 化粧品の歴史

化粧品の歴史としてははっきりまとまったものは残っていない。ただ、古代の遺跡やピラミッドの中の壁画, 彫刻, 副葬品等からうかがえるだけであるが、人類は既に4000年もの昔から化粧に関する知識をもっていたと言える。その頃の目の周囲の化粧の原型が、今の化粧法の中にも見られている(アイライナー, アイシャドウ等)。

また、化粧品の歴史は古代パミール高原の住民の焚香に始まると説く人もある。彼等が神や祖先の霊を祭る時、祭場にあたる場所に香をたき込めて潔めたといわれている。その香の煙をあびた人達は、犯した罪や汚れが潔められ神や祖先の霊の前に出ることが許された。神の座を潔めるための焚香が、生神とされた王の座を潔めるために使われ、次第に王族や貴族の部屋や住いに香をただよわせる様になった(香を供えることと香料, 香典は今でも引き継がれている)。この頃の香は乳香, バルサム(樹脂), 桂皮, 沈香等と伝えられているが、現在のものと較べることは困難である。

この習慣はギリシア, ローマと世界の文化の中心に伝えられ、香料の種類も変わってきた。10世紀になると南フランスで香料植物の栽培が始まり、丁度その頃この地に移住してきたイタリアの皮革職人がつくった革製衣類

## 調理と化粧品

の革臭を防ぐために多量の香料が消費されるに連れ、栽培はますます盛んとなり、南フランスは今でも世界の天然香料の中心地として栄えている。衣料への付香はその後も引き継がれ、フランスの著名な香水の多くはドレスデザイナーの協力によって作り出されている。

香料の種類も、東西の交易が盛んになると共に豊富になってきた。

調理におけるスパイスの歴史も、人類の歴史とともに生まれ、育ってきたものと思う。それらの原産地の開拓、ヨーロッパへの運搬等の探究が、アメリカ大陸の発見につながり、東洋への航路の開発となって、世界の歴史を大きく変えて行った。

化粧の粧にあたる、メイクアップ（仕上げ化粧）の歴史は、また別の所から発している。わが国の古代の記録によると、神楽を舞う楽士は顔にアカツチを塗っていたとのことである。また、臣下の契をした人がその儀式にのぞむ時も顔にアカツチを塗ったとある。それらは埴輪等からもうかがうことができる。

また、現在未開時代の風習をそのまま伝えている種族の間で、全身を、赤、黄、青、緑等の原色の顔料で粧ったり、顔に限（くま）どりをしているものが見られる。今では祭のための晴姿である様だが、かつては戦いにのぞむ種族の象徴であり、彼等の間での他位を示す勇者の誇りを示すものであったと考えられる。それ等がそのまま現在の化粧の原点であるとは言えないが、美しく粧いたいという気持は、古今東西変わらない。

油による皮膚の手入れも古くから世界の各地で行われていたが、記録としては、エジプトでミイラの加工に多量の香油が使われていた。ピラミッドからの発掘品の中にも香油の壺が見出され、当時既に付香をした油が皮膚の手入れに使われていたことを物語る。

この頃から、地中海沿岸では、不乾性油の代表的な油とされているオリーブ油が、調理用に、また化粧用に使われていた。

## 6. 皮膚科学

化粧品の話を進めるに必要な皮膚について少しふれておく。皮膚は人体の表面を覆っている薄い膜状の器官で複雑な構造をもち、人体に対し重要な働きをしている。（厚さは2～2.5mm、面積は約1.6m<sup>2</sup>といわれている）。

### (1) 皮膚の構造

皮膚は、表皮、真皮、皮下組織の三層からできている。

#### ① 表皮

表皮は厚さ0.1～0.3mmであるが、表面から角質層、透明層、顆粒層、有棘層、基底層の五層に分かれている。表皮の細胞は、基底細胞と有棘細胞の一部でつくられ、

次第に表面へ押し上げられて行く。円柱型の基底細胞から棘（キョク）を有する有棘細胞（棘は細胞間をつなぐ橋の様な役割をはたしている）から紡錘型をした顆粒細胞へと変って行く。その間細胞内に硬質蛋白（ケラチン）が産生し、次第に細胞内に満ちてきて細胞核や小器官を排除して、遂に乾燥した無核の角質細胞となり、最後にフケ、垢として表皮から剥離して終う。これを角化と言い、表皮の細胞が生まれてから角化するまでに約28日間要する。

角質層の下には、体内との水分の交流を妨げるバリヤゾーンが存在し、水分の体内への侵入を防いでいる。

基底細胞の間には、星型の色素細胞があり、紫外線その他の刺激によって黒色素（メラニン）を産生、紫外線を吸収し、体内への侵入を防いでいる。

#### ② 透明層

通常、手掌、足底等に発達している。

#### ③ 真皮

真皮はコラーゲン（膠質）を含む強い線維組織で、乳頭層と網状層の二層からできているが、表皮ほどはっきり分かれてはいない。乳頭層は表皮の基底層に接し、真皮には毛細血管、神経が走り皮膚の栄養と知覚を司っている。真皮にも色素細胞が存在するが、皮膚の色を保持する程度である。

#### ④ 皮下組織

皮下組織には脂肪が蓄積されるので、皮下脂肪組織とも言われ、弾力性に富み、外部からの衝撃から筋、骨格を保護したり、体温の放出を防いだり、栄養の代謝にあずかっている。

#### ⑤ 皮膚の付属器官

皮膚の付属器官として角質器（爪、毛頭）、皮膚腺（皮脂腺、汗腺）毛細血管、リンパ管、神経の受容器等がある。

### (2) 皮膚の機能

皮膚の機能には次の様なものがあげられる。

#### ① 保護作用

皮膚は水分や紫外線の体内への侵入を防いだり、軽い衝撃から人体を守る等、外部からの物理的、化学的刺激に対し人体を保護している。酸やアルカリ等の化学薬品に対しては、蛋白質としての反応を示す。弱い酸に対して皮膚は収れん（凝固、硬化）する、調理で魚を酢でしめるのに似ている。しかし、強い酸には侵される。弱いアルカリに対しては柔軟になるが、強くなるに従いヌルルとして（一種の危険信号）溶解を始める。

#### ② 体温調節作用

皮膚は熱の不良導体で、体熱の放出を防ぎ体温を一定

に保つ働きをしている。体温の変化、外気の温度変化に対しては、毛細血管を収縮、拡張せしめたり、発汗によって調節をしている。

### ③ 感覚作用

皮膚には温覚、冷覚、痛覚、触覚の受容器があり、外界の変化等に対処する情報活動をはたしている。

### ④ 呼吸作用

皮膚は肺の1/100~1/200の呼吸作用を営んでいる。

### ⑤ 吸収作用

皮膚には選択的に物を吸収する作用がある。水分は吸収されないので水溶性の薬剤は皮膚の取れん、殺菌、漂白等に使用されるだけで、それに反し油及び油性の成分は皮膚から吸収される。とくに毛包から良く吸収されると言われている。

この油分も乳化してやると非常に良く吸収されるようになる。

### ⑥ 分泌作用

皮膚は分泌腺として、皮脂腺と汗腺をもっている。

皮脂腺は毛包に開孔し、常時皮脂を分泌している。汗腺には小汗腺（エクリン腺）と大汗腺（アポクリン腺）がある。

小汗腺は体表に約200万近く分布、常時汗を分泌している。大汗腺は思春期に発達してきて、体臭、わきが臭のもとになるが、成人となるに従い衰える傾向がある。日本人に較べて、食物の関係か外人が激しい。高湿、高温で発汗が伴わなく体温調節が不完全になると熱射病になる。

### ⑦ 皮膚膜と皮膚の緩衝性（中和能、復元力）

皮膚のpHは4.5~6.5と言われているが、これは皮脂と汗の混和物である皮脂膜の測定値である。

皮脂膜は皮膚の健康を守るだけでなく、緩衝作用がある。例えばpH5.4の皮膚に石鹼（pH10前後）を使うと、皮膚のpHはその時は8近くになるが、30分後には、pHは7、60分後には6.3と殆んどもとにもどって終る。水洗いによってはもっと変わらと思う。皮膚は酸性であるからアルカリ性のものを使うのは良くないと言う人もいるが、健康な皮膚ならば皮膚の緩衝性の及ぶ範囲のものならば使っても差支えない。しかし皮膚は緩衝性の弱くなった時にカブレ易くなると言われている。

### ⑧ 皮膚の栄養

栄養とは本来食品科学で用いられている言葉で、栄養素と言うと蛋白、含水炭素、脂肪、水、ビタミン、ミネラル等があげられ、健康の維持とはカロリー計算でつながっている。皮膚の栄養といった場合「皮膚の栄養とは、皮膚が健康な状態を維持している時を指し、これの維

第2表 皮脂の組成 (TGA, 40, 17, 1963)

成 分	(%)	平均 (%)
遊 離 脂 肪 酸	2.3~56.0	25.0
ス ク ワ レ ン	1.3~17.3	5.0
そ の 他 の 炭 化 水 素 類	0.5~10.0	2.0
ロウ類(ステアリンエステル以外のもの)	12.3~25.0	20.0
ス テ リ ン エ ス テ ル 類	1.5~4.5	3.0
遊 離 ス テ リ ン 類	0.7~20.0	1.5
ト リ グ リ セ リ ド	5.5~37.5	25.0
モ ノ お よ び ジ グ リ セ リ ド	3.0~13.5	10.0
未 確 認 お よ び 微 量 成 分	5.0~12.0	8.5

(平均は各成分のものです)

第3表 皮脂の組成(性別、年齢別) 佐藤、森川(資生堂)

成 分	性 別			男 性
	年 令			
	21~25	35~38	39~40	21~32
遊 離 脂 肪 酸	12.8	7.8	9.4	20.6
ス ク ワ レ ン	11.8	15.4	17.0	14.0
ロ ウ 類	15.7	14.4	16.5	21.3
ステアリンエステル類	1.4	1.5	1.5	1.1
遊 離 ス テ リ ン 類	1.0	1.3	1.6	0.8
トリグリセライド	51.8	55.1	47.8	36.4
ジグリセライド	5.0	3.7	5.1	4.8
モノグリセライド	0.7	0.8	1.2	1.1

持に皮膚が必要とする成分を栄養成分という」と言えるのではないかと思う。

皮膚の健康状態の維持には皮脂膜があたっているが、これら天然の分泌物は非常に酸（腐）敗し易く、それらを取り除くのが洗浄化粧料で、清潔になった皮膚に油分、水分を補給するのが、基礎化粧料で、整えられた皮膚を美しく粧うのが、仕上げ化粧用のメイクアップ製品である。

本来ならば、皮脂成分と同じ成分の油分があれば一番良いと言うことになるが皮膚の組成には個人差が大きく、多くの人が分析結果の発表をしているが、それらは第2、第3表で示されているようにバラツキが大き過ぎる。

### ⑨ 皮膚の状態

化粧品は健康な皮膚を対象としているが、この皮膚を美容法上次の様に分けて考えている。

正常肌	脂性肌 (オイリースキン)	正常肌 (ノーマルスキン, 中性肌)
		乾燥肌 (ドライスキン)
	異常を生じ易い肌	

皮膚の状たいは体質(体調、年齢、性別)からのものと、その時々々の皮脂、汗の分泌からくるものがある。後者も四季の変化等に影響され易く、普段は正常肌でも、空気が乾燥して冷たくなると(秋~冬)乾性肌になり、

## 調理と化粧品

春から夏にかけて汗ばみ脂肪性に傾く人が多く、とくにその変り目に皮膚の不調を訴える人が多い。

## 7. 洗浄化粧品

洗浄用の化粧品にもいろいろなものがあるが、それらは、汚れの種類、程度と皮膚の状たいに従って適当なものを選ばれる。

「汚れ、污垢」は次の様に考えられている。

- ① 角化した表皮から、剝離した角質細胞(フケ、垢)
- ② 表皮上に分泌した皮脂及びその酸(腐)敗物
- ③ 汗の固形成分、尿素、尿酸塩類、乳酸、アミノ酸塩分
- ④ 外部から皮膚に付着した異物(用済みの化粧料等もこの中に入る。)

これらからできていく污垢は、時間と共に不快臭を放って、皮膚病のもとになったり、機能を阻害する恐れがあるので、これを取り除くのが洗浄化粧品となるが、污垢を大きく水溶性の部分と油溶性の部分に分け、洗浄の方法も次の様に考える。

- |   |     |                       |
|---|-----|-----------------------|
| { | 水洗い | 水洗い                   |
|   |     | 化粧水で拭きとる              |
|   |     | 石鹼等で水中に分散除去する         |
|   |     | 粉末に吸着させて水中に運び去る       |
|   |     | 溶剤で溶出除去する(化粧油、クレンジング) |

## (1) 水洗い

汗や埃等の簡単な汚れは水で洗うだけでもおちる。高湿で埃っぽいわが国では「おしぼり」が喜ばれるが、これは清潔感と清涼感を与えるところからも好まれる。

## (2) 化粧水での拭きとり

皮膚に水分を保留せしめ、柔軟に保つためのアルカリ性化粧水は污垢の酸性を中和しておち易くすると共に、配合してあるエタノール、グリセリン等が污垢を拭きとる役割をはたしている。最近、油分を可溶化剤で透明に溶解させた化粧水があり、この種のは皮膚のpHの範囲内に調製されているが、これらをコットンに含ませて拭いても污垢はとれる。

## (3) 石鹼

化粧石鹼は直鎖アルキル基を有する脂肪酸のNa塩で、言い換えれば「同一分子内に親油基(脂肪酸)と親水基(-Na)を併有している化合物」である。石鹼水が油(污垢)にふれると、石鹼分子の親油基(脂肪酸の部分)が污垢の方に向いて、親水基を水中に残して型で污垢を包んで終る。この様にして石鹼分子が污垢を端から少しずつ小さく包んで水中に運び去り、皮膚面から除去して終るのである。この時、振動を支えたり、摩擦をするとこの作用は非常に早くなる。石鹼は洗浄料としての他に、

化粧用クリームや乳液の乳化剤としても使用されている。

## (過脂肪石鹼)

石鹼は水溶液中では、加水分解をおこして微アルカリ性を呈する(pH10~11)。又日本の様に水質にめぐまれた所では応々にして污垢と共に皮脂の取り過ぎと言う現象を起こすので、わが国の石鹼には香料と色を配合する時に油分を添加したものが多く、この様にしたものを過脂肪石鹼と言う。油分の添加量は石鹼のJISの規格に従ったものが多く(JISでは石鹼は純石鹼分95%以上、中性脂肪0.5%以下の規定している)油分としてはオリーブ油、ラノリン誘導体、高級アルコール等の他に糖類等を配合したものがあり、これらの石鹼は細かくクリーミーな泡立ちがする。糖分を多く(10~20%)配合すると石鹼は透明になるが、透明石鹼は石鹼と言うよりむしろ洗顔料と言った方がよい。

## (4) 洗粉

洗粉は、わが国では古くから使われていた。仏教の伝来(522年)と共に僧侶が持ち込んできたものの中に藻豆(小豆洗粉)があった。污垢を粉末に吸着せしめ水中に洗い流して除去した。その後糠袋等が使用された時代があるが、現在では白陶土(カオリン)、ベントナイト(アルカリ性白土)に有機粉末としてデン粉、大豆蛋白、脱脂粉乳等を主体とし、これに洗浄の補助として界面活性剤を適当に配合してある。石鹼と違い皮膚に柔かく作用するので今でも愛好者が少なくない。

## (5) クレンジングクリーム

洗たくのドライクリーニングの原理を利用して垢を溶出除去するのがクレンジングクリームである。もち論ベンジンで皮膚を拭く事はできないので、同系の炭化水素の炭素数の多い、ワセリン、パラフィン、流動パラフィン、マイクロクリスタリンワックス等を主体としてつくられている。皮脂膜、污垢の水分に近い25~30%の水分を加えて乳化したものが多く、乳化の型によって油中水型(W/O)と水中油型(O/W)がある。前者はオイリーな感じがするが、後者はさっぱりとした感じで、それぞれ皮膚の状たいと好みによって使われる。

## 8. 基礎化粧料

污垢を取り除いた後の皮膚に水分と油分を補うのが基礎化粧料である。

## (1) 化粧水

皮膚に水分を保有せしめ、皮膚を柔軟に保つのが化粧水で、昔から皮膚の手入れにヘチマの水、キウリの水、レモン汁等天然の植物粘液が用いられ、今でも愛用している人がある。(天然のものには食添の防バイ剤を添加したり、エタノール5~10%、グリセリンを10%程度配

合して青臭さを除く程度僅か付香すると良い。)

現在ではこれら天然成分を構成している、ペクチン(酸糖体)、有機酸(クエン酸、酒石酸)、糖類、エタノール、グリセリン(プロピレングリコール)等から、天然のものとの効果の殆んど変わらないものがつくられている。グリセリンは吸湿性で、空中の水分を表皮上に保留せしめる作用があるが、濃過ぎると組織の水分を奪うことがある。

化粧水も、最近では皮膚を取れんする目的のアストリンゼント、油分を可溶化剤で透明に仕上げた栄養化粧水。皮膚の殺菌作用と緩衝性を補うベビー用のもの(尿の分解により生ずるアンモニアを押え、おむつむれを防ぐ)。ヒゲ剃後の皮膚には目に見えない細かい傷が多いので、殺菌剤を配合、エタノールを多く(5~20%)したものがつくられている。アフターシェーブローションで刺激を感じるのはこれらのためで、一過性の刺激なので害はない。この様に化粧水もその目的によって細分化されている。

## (2) クリーム

皮膚に油分を支えるクリームも油分の性質と乳化の型によって種類も変わってくる。

無油性クリーム：バニシングクリーム

弱油性クリーム：ハイゼニッククリーム、中性クリーム

油性クリーム { クレンジングクリーム  
コールドクリーム  
栄養クリーム

### ① 無油性クリーム

油分を含まないというのではなく、使用感から油性に感じられないところから無油性クリームと言われている。油分として脂肪酸(ステアリン酸)を主体としたもので、使用中に Vanish (消失) するのでバニシングクリームとも言われ、男性や脂性肌の人達に好まれる。脂肪酸は皮膚から吸収されなく、表皮上に皮膜をつくって皮膚を保護すると言われている。このクリームは化粧下等にも広

く使用されている。

### ② 弱油性クリーム

油分として、高級アルコール(セタノール等)が主体で、皮膚から吸収されるので軟膏ベース等としても良く使われる。ビタミン、ホルモン等を添加して、油性クリームの合わない人の栄養クリームとして使用されている。使用中に油分が一度白く浮いてきてから吸収され、塗布部に熱感があることがあるが、別に差支えない。

### ③ 油性クリーム

污垢を溶出除去するのがクレンジングクリームである。

コールドクリームは、使用する際に冷たい感じがするところからコールドと呼ぶ様になったと言われている。マッサージ用のクリーム油分としてオリーブ油が使われていたが滑りを良くするため、炭化水素(ワセリン、パラフィン)が使われる様になった。最近ではスクワランを主体としたものもある。

栄養クリーム、皮脂成分と同じ組成の油分がつくられれば理想的な栄養クリームになるが、現在それに近いものとしてラノリン及びその誘導体に、分析値から推定した油分を配合してつくられているものが多い。ラノリンは羊毛に付着して、動物の皮膚から分泌した油分で、工業的に採取できる唯一のものとされている。

### ④ ハンドクリーム

ハンドクリームは水仕事、とくに炊事等、移り香を嫌う方の手のあれを防ぐためにつくられている。香料を配合しないものが多いが、この場合原油の油やロウの臭いを除くために水蒸気を吹き込んだり、水素を吹き込んで脱臭精製したりしたものを使用している。

### さいごに

化粧品は非常に種類が多く、その一部にふれただけでまとまりがないものになって終ったが、参考書として次のものをあげておく。

池田鉄作編：化粧品学，南山堂，13版，(1978)

田村健夫編：化粧品化学，日本毛髪科学協会